

#### 第四章 魔少女殺し、緊縛肉地獄

(冒頭、ランセリイのクリピン・オナニーが終わるまで)

肌に纏わりつくような粘稠な闇に、突如として影の微粒子が混ざり込む。

それらは、砂鉄が磁力に引き寄せられるかの如く蟻集、収束していき、立体的な容を取っていくことだ。やがて、重圧すら伴うドロリとした射干玉の暗黒の底で、瀝青を練り固めたようなピッチ・ブラックの、得体の知れない何かが蠢いた。

——又サリ。

それは重たげに前後に揺れている。幾つもの尖った部位が、平たく薄いフォルムの縁から剣呑に突き出し、熱っぽく打ち震えていた。

禍々しい蝙蝠翼だ。

空間を渡って逃げてきた魔少女の物である。辺りを満たす悪意を孕んだ闇とは、濃度も質も異なる黒だ。見る者を奇妙に惹き付ける、輝かしい新月の黒。そして今は、凌辱の毒素に昏く染められ、寄る辺を失い肉欲に嘆き悶える喪恋花の黒でもあった。

呪詛世界の不気味な沈黙と、卑猥な性臭を振り払おうと羽ばたく皮膜の濡れ気とが、鬱と擦れ合う。

——フオモツ。

実体化した羽に続いて、生々しい月の白焰が燃え上がる。呼吸を荒げているかのように盛んにうねるそれは、幼媚な少女の肌の色だった。大きく上下する内に次第に凹凸をはつきりとさせ、やがて魔性の愛嬌を恥辱に歪めた、手負いの貌が産み落とされる。小振りな頭にそそけたベリーショートを戦慄かせ、ゴチャゴチャに乱れた感情を俯いて飲み下す、貌。自分の喉に突き立てそうな程に八重歯を剥いている。まるで、釣り鐘状に咲く姫鳥頭の花が、嵐に花卉を汚されて怒り狂っているような風情であった。

陵辱の脂を啜った蠟色の髪が、漆塗りじみた艶を放つ。その、汗でじつとりと湿った頭皮に香り立つような湾曲を効かせて貼り付いてくる感触が、魍魎の名残の卑猥な倦怠感で、彼女の意気を蝕んでくる。鬢足と襟髪は、過敏にされた半尖りの耳や、盆の窪を擦り、ゾクゾクと責め立ててきていた。頬を包む毛髪の花弁は、幾筋か外側へと反りほつれ、事後を思わせる筆風一過の婀娜撥ねをしている。あまりの悔しさに、黒髪とのコントラストの鮮烈な、白い角と銀の冠が半狂乱になって輝き、俯いている所為でハサリと妖眼に掛かった、長めの前髪の翳りからは、一種凄絶な憎しみの、蒼の光が覗くのだった。

——はあ……っ、はアあつく、あああ……っつ。

淫らに熱く濡れそぼった息遣いと共に、淡く滲み出した全身の輪郭が、結露の如く急速に形を成す。汗でべったりと肌に吸い付いた銀襟の玄裳の緞帳を、重そうに垂らしていく。——トツ、トツト、トン。

危うげな靴音と共に波打った空間に、豪華な厚布と幻想的なフリルが幾重にも現出。胸



子宮の地熱が炙<sup>あぶ</sup>つてきている。空間転移を繰り返してここまで辿<sup>たど</sup>り着く間にも、堪え切れず秘め所に指を伸ばし、追跡者の影に怯えながら引っ掻いてしまったことも、一度や二度では無かった。

もつとも、そんな子供騙しの慰めは、火に油を注ぐだけだった。寧<sup>むし</sup>ろ、性欲を鎮めようとする指の一搔きごとが、拭い切れぬ恥辱の刻印<sup>こくいん</sup>となって、幼肉の芯に疼きを蓄積させていく。事実、飢餓<sup>きが</sup>感<sup>が</sup>は高まり続け、立てなくなってしまうランセレイが床でのたくることの頻<sup>ひん</sup>度も、そこから集中力を取り戻してふらふらと立ち上がるまでに要する時間の長さも、どんどんと増してきている。

自分で肥大させた性衝動に負け、それを宥<sup>なだ</sup>めようとして更に栄養を与え続けなければならなくなる、悪循環。何とか深みには嵌<sup>は</sup>まらずにいられたが、それもそろそろ限界なのだ。「……んっ……にゅあ……あ……っつっ、胸に……っ、も……っ、まで……ツツ、クリトっ、リスが……っ、——ある、みた……イい……っつっ！」

儚い乳房全体にも、ズキズキと快楽の樹根がうねっている。息が苦しい。それらを脈打たせ蜂起<sup>あお</sup>を煽<sup>あお</sup>っているのは、淫らな熱波の収束地点、未成熟な膨らみの頂点で成長し続ける罪深い果肉、若さのはち切れたニプルである。ブラジャーを突き破らんばかりに痛々しく勃<sup>しこ</sup>ち痼<sup>こ</sup>り、痛切な官能の一撃を待ち焦がれている。

(わ、わたしの身体なら、我慢しろおおっつ)

凶鳥との再戦と雪辱を誓った以上、その残滓<sup>し</sup>如きに屈する訳には行かなかった。肩を抱いてクロスさせている腕に、己の胸を、ぎゅううううっつ、と押しつける。

聞き分けの無い箇所<sup>か</sup>を黙らせる為<sup>か</sup>に。

力を入れ過ぎて、接乳<sup>せつにゅう</sup>している前膊<sup>ぜんはく</sup>が、ガクガクと震え出してしまふ程だ。だが――。

「はうん!!」

途端、二つの小さな爆竹が、もどかしげに怒り狂い出した。硬く尖ったまま乳輪<sup>うす</sup>に埋められ、そんな風に快楽を窒息<sup>しき</sup>させられて堪るか、とばかりに暴れ始めたのだ。ビクンビクンと駄々っ子の幼児となって跳ね乱れる。ぐらぐらと揺れた桜色の斜塔が乳房の根元を掘り返し、媚痛とミキシング。不意打ちに「ひっ?!」と上擦<sup>うわす</sup>った呼吸に合わせ、拍動する先端乳首が、ブラジャーとネグリジェの隔壁越しに腕を押し返そうとする。

ギリユギチュイッ! 対するランセレイの、乳房への扱いは過酷を極めていた。接乳面と乳首が擦れ合わないように垂直に力を籠<sup>こ</sup>め続けながら、石臼<sup>うす</sup>で碾<sup>ひ</sup>き潰すかのようにグリグリと腕を回し、危険な感覚を封殺しようとしたのだ。

(こ、の……っ、逆らう、な!)

慎ましやかに膨らんだブラマンジェの蕾<sup>つぼみ</sup>が、巨大なスプーンの腹で真上から潰されるかのように、歪められる。血色の香り立つ、少女のエンゼルリングが、揺さぶりに弾圧されて底へと沈められていく。腕に抱え込まれている所為で、汗濡れたカップの前張りが同様に変形させられ、べっとり貼り付いてきていた。未発達の乳腺<sup>せん</sup>から噴き出す甘い熱気が内部に籠<sup>こ</sup>もり、まるで肌と生地間に生乾きの糊<sup>のり</sup>を塗りたくられて、それがムンムンと発

熱しているかのようだ。

「ひぎ——っ痛、く……っう！」

そんな中、見事な陥没乳首にされた幼蕾が、自由を求めて天蓋に体当たりを敢行。みっちり詰まった微肉を搔き分けて、乳頭を飛び出させた。練り菓子のように繊細な桜色のニプル肌が、柔らかなベルベットの裏地と擦れ合う。汗氣を得ているそのカップ布は、パウダーをはいたように摩擦の砂を敷き、ざらりと待ち構えていた。無謀な突進で鏝迫り合いを繰り広げ、鼠火火の如き軌跡を描く、勃ち猛った小肉塔。ビリビリという悦楽の紫電を、未発達の乳口から、乳暈に沈んだ根元へと駆け抜けさせる。

(乳首死ぬっ、乳首死ぬっ、乳首ひぬふうううっ!!)

双乳の火山で溶岩が逆流し、まるで体内へ向かって噴火が起きているかのようだ。自分で撃ち込んでしまった貫通爆弾に、胸部全体が歓喜の悲鳴を上げる。心の臓が止められてしまいうそう。

「あ……あが……あつつ、————ああ……っつ……っつ！」

予想を遥かに超えた抵抗に遭い、ボタボタと唾液が零れた。

声を抑えようと力を籠め過ぎて、か細い喉が痛くなる。

乳首では無く、自分が窒息死させられているかのようだ。

雌牛状の角のなだらかに蛇行した尖端で、硝子じみた材質の床をガリガリと削り、切なさに負けて鼻梁を振りたくる。飛び散った破片を、熱い吐息で湿らせていく。

「ふ、っ……、うう……っつ……、っ、く、……ひ……ッッ」

喘ぎ乱れるのは、本人の媚肉のみに留まらなかった。主の悪戦苦闘に合わせて、はしたない有様になっていく衣裳。それもまた、淫情を煽る一因となるのであった。

背中を痙攣させるランセリイのゴシックドレスは、二層構造のワンピースだ。(胴腰一体型) 一層目はコケティッシュなネグリジェで、夜の精華を素肌に直接纏うかのような、セサミクリーム色をしている。それは、胸元から太腿半ばまでを覆い、二枚重ねのショートスカートの、内スカートの役割も果たしていた。ドレスの二層目は、クラシックで堅牢な、カカオブラックのコレクション・スカートである。布鎧としての頑強さも備えたそれは、アウトター・ドレスとして外周からネグリジェを締め付けてきている。外スカート部分のデザインとして大きく前が開いている為、正面からは、柔らかなネグリジェ・スカートが、アッシュ・フリル生地の花を咲かせているのが、よく見える。

今、三つん這いの彼女が極端に頭を下げ、反比例して高々と持ち上がる臀部から、熱っぽい尻尾を悩ましげにくねらせている所為で、押さえる物の無いネグリジェ・スカートが、お腹まで捲れ返り、月魄滴る幼白い臍周りの麓線が、キューートな魔性の色香も露わに覗いてしまうことだ。

「っ——ん——う！ あっ、ち——っ——ん！ い、け——えええ

——っ！ 感じる、の、なんて——っ、邪魔ああ——っつ！」

噴き出す汗が細い河を幾筋も描いていくお臍周りの上で、ヒップのプディングが、ノワ

ールシヨーツのカラメルソースを、ぴっちり貼り付けている。微髻の丘陵二つが盛り上げ、揺さぶる、その漆黒の生地からも、芳しい乙女の汗が滲み出していた。フロントとバック、臍下と尾骶骨近辺の見事に窪んだブーメラン型の腰布だ。お尻の凹凸によって生じたバックラインの隙間から、可憐な菊門が覗き、谷間へと流れ落ちてくる雫に撥られて、ひくひく、震える。

汗腺から泉の如く湧く発情の証は、お尻の谷間を舐めるように流れ、つるりとした銚尻尾の付け根の三角盆地へと溜まっていく。そして、切羽詰まった少女が狂おしげに腰を振る度に、左右に零れては滴り落ちて行っていた。白肉の塑像の起伏に沿って横腹を撫で伝い、どうやっても逃れられない、淫悦に招かれる感触を刻みつけてくる。

更には、シヨーツ全体をびっしりと濡らしていく甘酸っぱい杏香の汗が、尖り勃ったクリトリスの粘膜や、根元の包皮の隙間にまで染み込んでくる。その熱気の籠もった淫猥な湿り気が、何よりも媚薬となつて、ずっと肉芽を蝕んでいる爛れた疼痛の度合を引き上げていくことだ。

「はん……はんう……つつ！ あ——せ、な、んか、あに……つつ、犯さ、れて——つつ！ お……豆も、あそこも……つつ、おかし、く……うう——つつ！」

呼び水を得た牝豆の官能のうねりが、あつという間に女陰全体へと広がり、焼け付くような疼きの業火で苛んでくる。灼熱の血潮の流れ込む陰阜が、心臓となつたかのように、ドクンドクン、と拍動した。そこに貼り付くノワール・シヨーツが、荒々しい摩擦を待ち焦がれながら、命を得たかのように脈を打つ。まるで肉のアイロンの如き熱を孕んで、無惨に蹂躪されたがっていた。

（治まれええつつ、治まれええええつつつ！！）

今、この股間を何処かに擦りつけてしまったら、墮ちる——。そんな危機感が、ランセリイに、お尻を高く跳ね上げさせた。淫欲に引火したのを叩き消そうとでもいうかのように、布鎧の萼の中でフリルの咲いた、薔薇型のローゼット・ミニスカートを振り立てる。新鮮な空気を入れて、劣質な熱気を追い散らそうとしている。同時にそれは、甘SMめいた自宥行為でもあった。裳裾が撥ね除けられ、前後左右に激しく揺すられる。ポリウムと汗気もあつて、ぴゅんっ、と風斬り音を立てた。次第に、少女がスカートを振っているようには見えなくなってくる。まるでフリル製のはたき達が、子鹿の腰の周りに集り、軽く叩いてはあちこちへ追い立てる残酷な遊びをしているかのようにだ。

「くひん?! きううううう！ ひや、だ……つつ！ スカートの、までえええ……えっ！」  
今の状態で、そんな前戯じみた擦過を受けるのは、千条鞭で打擲されるに等しかった。さつと尻が紅潮する。触れてくれる者の無かった太腿が、触れられる悦びに汗香の涎を振り散らす。地にキスをした膝小僧が歓喜に痙攣し、その動きでニーソックスを引き絞られた脚線が、被虐的な悶惑の悲鳴を上げた。陰阜に官能の爆弾を抱えた魔少女は、股の付け根が粘つくような恍惚の産湯に沈められ、靴の中の足指を出鱈目に踊りくねらせる。

「——にゅア……アつ、許さ、ない……い……つつ、これい、じよ……お……オっ！」

悲壯で恥劣な、エアオナニー。

快樂の水を一滴一滴、出し惜しんで与えることで渴望を乗り切ろうという、涙ぐましい努力であった。ねばねばと圧迫された箇所から滲み出る快感が、本格的な自慰をしたがる凶暴な衝動を、束の間だけ発散させてくれる。そしてその後、淫欲の炉に風を送られたようになつて、より一層濃さを増した疼きの焰が、ぶり返すのだった。

「く、しょっ！　くりよううっ！」

魔悦の禁断症状に震える黒い衣裳の内側で、肌が真っ赤に色づいている。暴れて活発になつた血行に乗り、股座の疼きが全身に波及しているかのようだ。蒸れた仔牝肉が汗腺から浅ましい分泌物を垂れ流し、淫猥な熱気で毛穴の奥まで蕩けそうになっている。快樂のマタタビを嗅がされた黒猫は我知らず身を振り、感じる突起や過敏な柔肌を凹凸のある物体に擦りつける夢想到に浸つてしまうことだ。

「ふう——う、うう……あ、あ……ツ、——くあ、あおおうつつ」

興奮でカタカタと肩が震える。レトロな時限爆弾のタイマーの如く、カチツカチツと歯の音が鳴つてしまった。ニプルを封じる為にクロスさせている腕が、肩のパフを掴んでひしゃげさせ、悔し涙とも随喜の涙ともつかぬ汗の生汁を絞り出していくことだ。

脾腹には内側から破裂しそうな程に熱が籠もり、爛れた神経が剥き出しになつてしまつたかのような粘膜めいた輝きに熱んでいた。素肌に纏わり付くネグリジェに乙女の杏汁が染み込み、じわじわ、と滲み広がっていく湿潤感をつぶさに味わわされ、ゾワゾワと意識を掻き乱されてしまう。臍周り、太腿、外気に触れて過敏になつている肌はと言えば、蟻の歩みの如く汗の珠が伝っていく感覚にヒステリックに反応し、爆竹が鳴るかのような媚電を放つて、煩悶する幼い肢体を責め苛むのだった。

「——お——おお、お——ん——っ！　ひ、響い——全部っ、クリにつ、響きゆううううつつ！　ほあ……っ、ほ——オ……みゆううううんんつつ！」

それらの悦が、全て、女陰の罪の芽に轟いてしまう。

火の付いた導火線のようになつて疼く軀。動物が砂浴びをするかのようにのたくり、身を床に叩きつけ、肉の欲求を打ち消そうとするランセイイである。

クリトリスの熱が乗り移つたかのような横腹を冷たい床に擦りつければ、アウター・コルセットの内側で蒸されたネグリジェの熱気が、両者の重なり目から蒸気の如く噴き出した。まるで荒い艶息を、フウウツ、フウウツ、と吐き出しているかのようだ。

「むい……いっ！　勝手にっ！　昂つてええっ！　かいら——っ——身体あ——酔っぱ——りやああああ……っ……フウウツ！　ムぬゆウ、ふっ、くつつ、むりやああっ！」

左右にくねる度に、肘や腕を通じて、乳首にも揺れが伝わってしまう。背中 of 蝙蝠翼が弾かれたように、ピン、と上に伸び啼いた。うなじも、カラー・チョーカーが外れそうな程、ブルリッ、と痙攣してしまふが、それでも、じつとして出ることが出来ない。

火を叩いて鎮火するかの如く、激しくうねらせた銛尻尾で、背中と言わず、腿裏と言わず、自分の身体を打ち据える。と思えば、瞬転、蛇の如くコルセットに巻き付け、ぎゅう

うつつと胴を締め上げることで、正気を保とうとする。

「フキゅーっ！ かひゅー——や……っ……かあ……つきゅううううつつ！」

とうとう最終手段で、内腿が床に触れそうな程に開脚し、衣装越しに横隔膜や膈の辺りを床に擦り付けた。解剖台の蛙じみた、無様な格好。笹舟のような幼い白肉のアーチが撓む。肉の震動を子宮に響かせ、それで乳首や性器を直接擦りつけたかのような、代償的な興奮に浸るのだ。濡れ切った漆黒のショーツを、つん、と小突き上げているクリトリスの頭が、動きの所為で、床すれすれにスイングされる。今にも接触してしまいそうな、その気配だけで、もう、潮噴きが暴発してしまいそう。

(お、治まら……ない……っ)

狂宴の主軸達を失ったタロットの内世界は、回転の止んだ幻灯機のように仄暗く物寂しい。まるで廃棄されたスタジオの如く何も無く、果てしなく渺茫と広がっている。

凍えるほど孤独な大気の中で、熱を孕んだ体軀が思い切り伸び上がる。

「……っ、く……あ……っ！ ——っ——あ——ア——っ!!」

遂に堪りかねた魔少女は、泳法の走者が平泳ぎから背泳ぎに移るかのように腰をくねらせて、ころん、と仰向けに転がってしまった。

漸く根元を擦りつけて貰えた蝙蝠翼が、嬉しげにバツサバツサと跳ね回る。

「く……うう……こんなこと、してる場合じゃ……あいつが追ってくるのに……っつ」

更に、少女の細い脚が生まれ立ての小鹿の如く震え、柔らかい内腿が擦り合わされた。ドロドロとした蕩肉のマグマが毛穴から溶け出していくような感覚。それに唆されて、膝を何度も閉じ合わせてしまう。局部の朱蛹に刺激を送り込んでいく。

「んう……んううう……っつ、……っ！ ンうんっ……フ……ッ、ア……ッ！ 止まれっ、たらあ、止まれ、ええ！ こん、の——っ、裏切り、者おお……お……おとおっつ！」

その動きが次第に勢いを増した。踵にも力が籠もり、腰が浮いたかと思った次の瞬間、罪楽に囚われた蜻蛉の肢体は、背中を床から離して首肩と両足で自重を支える半ブリッジの姿勢を取り、下着に浮いた陰阜の膨らみを宙へと突き上げてしまったのだ。余勢に促されるがままに両膝を広げ、ますます恥部を外気に晒しながら、墮ちた幼牝に羽化せんとしていく。

「……あ……ア……ッ！ ヒ……キヤ、フ……ウウ……ッッ」

声を殺そうにも、秘所の爛熱が、それを許さなかった。

痲った粘膜突起を恥ずかしげに押し出し、こんもりと膨れ上がった未成熟な肉アケビ。漆黒の生地を被って密やかに息づき、余人を跪かせて頬擦りを求めるかのような蠱惑的な香気を漂わせている。小悪魔のエクレアである。今にも燃え出しそうに火照っていて、軽く突いただけでも、トロリとクリームを溢れさせてしまいそうだ。

「こお、っ、こ……、これ……え、ダメッ、疼……きゅっ、あそこっ、クイ……クリッ、も、もっ、ダメに——な、りゅうううっ！ ひく、しよ、今すぐっ、仕返し——殺してっ、やるっ、からあああああつつ！ チビ、豆のっ、分際でえええええつつ！」

目を新鮮な苺色に染めた少女は嫌々と首を振り、ショートスカートの上から両手で股間を押さえ込んだ。魔術で修復してショーツを穿き直したのは、間違いなく失敗だった。乱暴に扱われて捲れ上がったまま戻らない陰唇がピリピリとし、そのまま濡れ生地に押し花にされて、ズクンズクンと快楽の火の粉に炙り続けられている。体積を勃ち増しているクリトリスの頭に至っては、繊維の鉄条網へと、その身を食い込ませる深さが加速度的に跳ね上がり、まるで、終わらない線香花火となつて、快感の火花を延々と散らし続けているかのようだ。

しかも上から、掌を乗せた少女が身悶えるのに合わせてパタパタと揺れるスカート・フリルのフェザータッチと擦れてしまつて、うなじの産毛が逆立つような魔辱の逢瀬の甘美な名残が総身に走る。しかし、今更脱ぐなどという恥知らずな真似も出来よう筈が無い。

「ふあ……っ！」

肉体と脳裏に刻まれた、淫らな暗示が囁く。このまま、股座を隠すのに使っている指を、陰唇に布ごと突き立ててしまえばいいのだ。折角、お尻の下にスペースが空いているのだから、片手は腰の裏から伸ばして、両手の指を噛み合わせたベアトラップ・スタイルにし、思う存分にヴァギナを掻き回せばいい。

（ああ……っ、またああ……っ！）

『品行を犯す淫詛』。相手の行状を劣情が肥大化する方向へと誘導し、外面から内面を蝕もうとする、汚染猥呪である。

逃亡中にも、気が昂る度に幾度も感じさせられてきた幻唆。自分が陥落した無数の並行世界と、夢の膜を一枚隔てて重ね合わせられたかのような、現実を希薄にされる酩酊感。肢体の周りを、絶頂へと至る幾条もの淫らなレールが取り囲む。想像の中の自分の指達はその上を辿り、弄んでいく様子が、まざまざと脳裏に描き出されてしまう。その癖、それに従つたらどんな快楽が得られるかまでは全く分からず、未知の扉を構えて期待を煽るだけ。手ぐすね引いている悪辣な好奇心の罠に嵌まつてしまつたら最後、再び忌まわしい暗示に牝の髓までしゃぶり尽くされてしまうことだろう。

（そんなの、しない！）

それは陵辱の残していった後遺症、植え付けられた悪性の想念だ。視えるのは凶鳥の息のかかった自慰方法ばかり。ヴュゾフィアンカの手垢に全身を犯されているかのような嫌悪感を覚える。改めて、この場を肉欲に負けずに乗り切ることが魔少女のプライドに関わる重大事なのだと思ひ知らされる。

（あんな奴の……っ、思い通りにされて——っ、堪るか！）

底の見えない奈落の如き渴望の中で、必死に藁を掴もうとする少女は、左掌の指でスカートひだの襷を掻き、掘り返すように捲り返した。続いて同じ手で、綺麗に窪んだカーブを描くブーメラン・ショーツの漆黒の縁を引っ掴む。そしてそのまま、潰れよ、とばかりに、ぐいつつと臍の方向へ引っ張り下げたのだった。

——ギユウウウウウウツツツ!!



「んなああああああああ———つつつ!! つつくうううう!!」

濡布のビニールで、クリトリスが真空パックされた。フロントの布が引き絞られ、チャール・グレイに薄く変色する。割られた陰阜に深く食い込む。股座から背骨に沿って、甘い痺れが駆け昇った。膣前庭に、鋭い二等辺三角状になった押し布が踏み被さり、幼豆が極度に圧迫される。ズン、と、尾骶骨にまで快樂の地響きが轟いた。裏側の透けた濡れ色の黒から、ビクビクと充血した紅真珠が覗くことだ。

擦るのでは無く、締め上げる。それが、性衝動への抵抗の矜持だった。

「い、いい加減にしるおおつつ!」

左手で下着を引っ張り肉芽を締め上げながら、淫欲に身悶えるランセリイは、ままならない苛立ちを、肉の蜂起の急先鋒になっている粘膜突起へ、ぶつけようとした。

(こいつさえ……っ、黙れば……つつ、身体が落ち着くんだ……つつ!)

翳された右手の指間の影から湧いた触手が、右中指の第二関節から先を覆い包む。エナメル質を思わせる艶のある黒い表面に、模様として真っ白な雷条が螺旋を描いて絡みついた——、それは、触手製の指サックであった。

怒りの籠もった右手が、左掌の前に出る。触手サックを嵌めた、その中指が、親指に頭を押さえられて、ぐいん、と円状に撓められた。そして、盛りのついた哀れなクリトリスへ急接近——。

「お、おとなしくしないなら——、こうだつつ!!」

——ばちゅんつつ!!

デコピンならぬ、クリピンである。弾いた指の先端——ヌルツとしたサック指の先端が、クリトリスの頭を痛烈に跳ね飛ばした。黒い引き絞りに逆らって、ぶくっ、と充血した膨らみを浮かせている、負けん気の強そうな小さな Tent。それが、ブルン! と頂点が分裂したかのように弾まされる。なんとということか、ショーツの生地越しにゴム塊じみた肉の弾力をぶつけ、紅葉色の鳴き所へ激震を送り込んだのだ。

「はうつつ!!!」

瞬間、肉芽の髄脈を桃色の銃弾で撃ち抜かれた。

「——つつ、くふううううつつくうううううううううううううううううつつつ!!」

少女の華奢な腰は、その衝撃に耐えられない。半ブリッジの姿勢から、臀部を蹴り上げられたかのように、反動で陰阜を跳ね上げさせる。手荒く扱われた紅玉芯の表面を歓喜に粟立たせたかと思うと、尿道から黄ばんだ嬉水を漏らしたことだ。

バネ仕掛けのようにますます膝が大きく開き、爪先の位置が滑って肩幅よりも広くなる。これ以上は無いらいうぐらいの、獣淫用ブリッジとなって、柘榴色に充血を増した急所を身体が一番高い所へ突き上げる。膣前庭が淫猥にぬらつき、アコーディオンの蛇腹を畳んだかのように縦皺の山脈となっているショーツの「峡谷の底」から、透明な分泌液や黄ばんだ液体が、溪流の如く滲み出していった。

「~~~~~ううう~~~~~ううう~~~~~ううう~~~~~ううう~~~~~ううう~~~~~ううう~~~~~ああ!」

まるで、高速の弾丸が、発射音を置き去りにして着弾したかのようなようであった。脳天まで突き抜ける鮮烈な悦楽の衝撃。その後から遅れて、心地良い痺雷が股座から臍へと、じんわりと広がっていく。

「は……………っつ……………は、ひ……………ん……………っつ！」

一瞬、少女は何もかも忘れて惚けた。

「は……………あ……………は……………あ……………あ……………っつ、ひ……………い……………っつ」

切れ長の蒼眼にみるみる涙が溜まり、瞳孔が悦楽の水面へと沈んでいく。歯をカチカチと打ち鳴らしながら、焦点を失った瞳を虚空へ向け、畏れにも似た興奮に抱かれて身震いをする。

(い、いまの、すご、おお…………)

制裁のつもりで放ったそれは、とんだオウンゴールであった。

(こ、こしが…………、死んじやい…………そう、だった…………あ…………っつ)

ショーツを引っ張り下げている左腕が、力の抜き時を失ったまま、ワナワナと震える。その振動が、ぶつくと快感に腫れ上がったクリトリスへ伝わり、微細な悦を送り込んでくる。凶らずも、息絶えた獲物を更に甚振るような仕打ち——。

「ア…………ハ…………ッ」

ビリビリとした余韻が、牝の芯を奮わせる。魔性の身体の奥底からムラムラと、刹那的で破壊的な衝動が込み上げた。淫らなそれは、あたかも幽体離脱の如く本人から乖離し、悶える自分を見下ろして、熱っぽく囁いてくることだ。

——さあ、言うことを聞かない悪いクリトリスに、お仕置きしてやろう？

「…………ハフフツ、…………ア…………ア…………ア…………ハフフ、…………ウウフ…………ッ！」

——ほら、今度は角度を変えて、もつと指に力を込めて。根元を狙って弾いてご覧？

——凶々しいクリトリスが言うことを聞くまで、虐めてあげようか？

夢遊病にかかった指が、ふらふらと元の位置へと戻っていく。

「ひキュン!! きゅオひィ!! あ…………っつ!!」

気がつけばランセリイは、夢中になって牝の珊瑚玉を弾いていた。

「ひがつ、違アアっ?! こ、こんなつもりじゃ…………! いら…………いつ、こんな刺激、いらない…………いつ!!」

——パチュツツ、パチュン!!

プリツと小粒に盛り上がり、紅真珠にコンドームを被せたように貼り付いている黒布。側面に回った中指が、ショーツの引き絞りによって膣方向から押し上げられ、仰向けに倒されているクリトリスの付け根——喉笛を狙って、スイングを送り込む。

ランセリイの指という芯に、海藻を幾重にも巻いて厚みを持たせたかのような具合の、軟体生物のクッションが、それ自体も潤滑油じみた粘液を分泌しながら、指の運動エネルギー全てを甘美で破滅的な刺激へと変換し、発情した膨豆に伝え響かせてきた。

「くおっみっいいィ!! くおっ、くおっおあおっつ、ふおあにゅああ…………ッ！」

浜辺に打ち上げられた真つ赤な鯨が、落雷を浴びてのたうつかのように、官能の急所が断末摩の随喜に跳ね踊る。

腰が白く染まった。その迅雷が冷める間もなく、飛燕の如く舞い戻った指が宙を切り、鋭敏な突起の天辺を掠め、淫惚のソニックブームを叩きつけてくる。スカートの内側で苛烈な悦楽の閃光が渦巻くことだ。

肉欲を鎮めるのが目的ならば、せめて一撃目の余韻が治まってから二撃目を与えればいいものを、待ち切れずに次撃を放つものだから、業悶のパルスは弥増す一方だ。

「うあ、あ……ア……っ！ はう————ッッ、あふウ————うッッ、止まら、にゃ、いいいいいいいいいい……っっっ！」

——ヒュピッ！ シュピッ！ ピッピチュンッッ！！

高速で飛来するサック指と、赤肉の透けた黒生地地の接触が、幾度も幾度も仔牝蜜の雫を散らす。一撃毎に快楽神経が灼かれ、はしたない開脚姿勢が股関節の角度を増し、魔少女の腰が高く高く舞い上がる。

「ふ————ッッきいいいっっひっひ！！」

クリトリスは、人の字型の器官である。包皮から顔を出しているのは、その頂上部分である所の、氷山の一角に過ぎない。人の字の二本足に当たる陰核脚の部分は、尿道や膣洞を挟み込むようにして体内の小陰唇の裏に伸びていて、深く快楽の根を張っている。

今、ランセレイが陰核龜頭を弾く度に、特大の悶絶パルスがクリトリスを構成する海綿体組織へ通電して悲鳴を上げさせた。刺激の余波を受けた小陰唇が充血し、ぎゅんぎゅんと膣口が引き締まる。

「は……が……っっ！ 壊れ……え……っ、お、ふおっ、お股が……っ！」

魔少女の嗜虐性と被虐性を同時に満足させる、自己破壊。条理から外れた、逸脱の悦である。腰布を呑み込まんばかりに蠢く陰唇が、牝真珠を淫烈の雷に貫かれる度に、一瞬、時が止まったかのように身を強張らせ、官能の大高潮に泣き狂う。

(で、でもっ、これなら、いかなくったって、十分……っ)

毒を以て毒を制すと言うではないか。絶頂したいという欲求を、ソレに匹敵する快楽で燃やし尽くすのは、十分にリビドーへの勝利、コントロールの成功とするに足るのでは？ 理性と肉欲との極限の闘ぎ合いの中、プライドと本能の天秤が釣り合った。目的が随ちる。すげ替わる。身体の疼きを鎮める事から、絶頂しないまま、身体が満足するほど濃厚な快楽を味わう事へと。

「ハ、ハハッ、ハハアハハハ!! ぎ、ざまあみろっ、わらひ、やらしいことだっって征服できるんだからっっ！ こうしてこうしてっ、もっともっと、ク、クリの首を締め上げて……降参させて、やって……ええっっ、押しつけられたみたいにイなくなっっっって身体あ、言うこと聞かせられるんだからああああっっっ!!」

媚獄の教師達に凄絶な反抗期を見せながら、若い暴走は、プツン、と緊張の糸を断ち切った。

身投げにも似た浮遊感。白い愉悅が閃く。己の意志が宿り、いよいよ痛烈さを増した指が、狐の影絵の如き形状を取り、幾度も幾度も口を跳ね開く。魂を蕩けさせる三拍子のリズム。触手サクが、もつと指に巻き付き、人差し指で、薬指で、小指で――。入れ替わり立ち替わり、親指を根城にし、四方八方からクリトリスを責め鞭るのだ。

「ひあんつつ、はきやああおつつ!!」

――ビチツ、パチユイツ、ピュヴンツ、バチチツツ、バチチツツピ!!

秘め事の帳の中で、目標は既に、ピクピクと痙攣をしている。哀れな起き上がり小法師の、浮沈芸だ。降り注ぐ淫打に、紅いベルが打ち鳴らされ、尿路に悦楽の火が走る。ただでさえ、女性の身体は男性に比べて尿道が短く、漏らしてしまい易いの。

自分が屈服して達するのが先か、肉芽が音を上げて餓え尽くすのが先かのチキンレースである。少女の肉体は、それを行うレーシング・サーキットと化していた。膣前庭から飛び込んだ快楽が、全身の淫悦神経を爆ぜさせ、膣を喘がし、肩胛骨の間をギュツと硬く寄せさせる。体内を一循環して肩を通過し、スタートラインの指へと駆け戻ってくる。あまりの快美に、一周回毎に指先が重くなっていく、輪廻淫業の縮図。歓悦の果てへ向かって突き進む道を、ギリギリの崖つぶちで矜恃に喰らい付きながら、墮ちていく。

(後一回だけ、後一回だけ、したら、きつと身体が満足する……から……ッ、あ、あひよ一回、あひよ一回だけえええ……ええ!)

形のいい膣を、きゅつ、と窄ませ、ずるずると性の泥沼に嵌まっていくランセリイは、興奮のあまり、お尻の谷間に食い込んでいるショーツにも悪魔尻尾を引っかけた。そして斜めに思いつき引つ張り下げれば、綾取りのタワーのような急角度を描いた布が、アナルの菊皺を擦り、むず痒さと背徳感の薪を淫媚の暖炉に焼べていく。膨らんでいく興奮。

「ふううう……ウツ、ふヌオふうう……ふうつ、ふクアツうあううう……つつ!!」

魔少女の周囲の影が沸騰したタールの如く沸き立ち、片面にびっしりと肉瘤を生やした笹の葉状の触手へと変化した。細長い曼珠沙華の雄雌蕊の如く彼女を中心に無数に突き生え、艶やかな闇色の表皮を盛んにのたくらせる。その様は、さながら生きて蠢く黒瑪瑙細工といった趣である。淫らに蠕動する疣の並んだ、粟粒群の部分だけが、生き物の腸を引き裂いたかのように赤く、ぬめった軟泥質の突起群で作成者の胸や口腔をねぶってくることだ。

(あ……、シエリスと、おんなじ色、だあああ……つつ!)

マザコンじみたことを胸中で呟きながら、オナニーに熱が入っていく。

「あむ……つつ……はぬ……つつ……ふうううウウつつ!!」

自分の操る触手を喉の奥まで突き込んで、舌を絡め、裏筋だと思われる部分を舐め摩る。疑似イマラチオに恍惚と酔い痴れ、水飴じみた粘液を黒衣に浴びせかけさせた。己の装束を泥溜まりに打ち棄てられた造花のような惨めな有様にしながら、淫欲の熱粘海で藻掻き続けていく。

「はあ……はア……つつ、た、足りない、いつ、もつと……もつろおお……つつ!!」

絶頂という奈落の上に一本の綱を張って、その上に寝そべって己を穢し続けているような物だった。官能に殺されてしまうか否か、自分の矜持を賭け金にして、確かめている。その事に、背筋が粟立つ程のスリルを感じる。生まれて初めての、純粹に自分の意志から行うマスターベーションだ。クリトリスの剥けた肉莖の内側まで煮え滾ってしまったそうだ。

「さ、流石っ、わたしの身体、だあ……っ、全然、満足しない……っ、言うことおお、聞かない……っ♪」

喉を見せて仰け反る、手流の暴君。自己を極限まで追い詰める、肉の錬金術に酔い痴れる。凶鳥の暗示に従うまいとするあまり、ランセリイは独自に快楽を加工していく術を編み出しつつあった。フリッパーズ・ピッキング。己をギター、快楽神経を弦、指を演弾具のピックにして、淫らを奏でるのだ。

「——っ、カ……っ、く、おお……！ ……け……っ……鳴い……ちやえ……ええっ♪」  
マツチを擦るように右指の触手サツクの腹と、黒膜越しの赤い頂きを触れ合わせて、感応度のチューニング。

ピンツ！ と一弾きすると、全身が一本の弦になったかのように震え悶えた。

「——ヒ——ツ——ああ——ツツ!!」

ギクギクと腰が反り返り、ソロ演奏の開幕だ。

腿に置いた右手の指を一本ずつ撃ち出して、リズムカルな嬌声の単弾曲を奏で出す。

「ひうっ、びうっ、きひゅうっ！ ツ——びみイイイイツツ!! こ……お……れ……え……っ、こ——ひ、に……っ……きくううううううっ!! ——カ……ッ——オ——ッ——コふオ、オン！ もおおおッ、くりようオ……っ……オッ、ろアアあああああああああつ!!」

まるでギターのネックを持つかのように、臍まで下着を引き下げているレフトハンド。五指と尻尾を布に食い込ませれば、力のかかる六つの線のような物がクリトリスに集中し、鋭敏な急所に自在な刺激を与える不可視の六弦を作り出す。

それらを押さえる強さに緩急を付ければ、微細な変化が極彩色の快感を生み出した。

「はふ——あふ——ううっ、……くゅん、きゅ——ツツ!! ふりやつ、つひやら！ ハ——ヒは——ッ、ふゅら——ああア!! ひらららららららら——ツツ!!」  
色取り取りな快楽の鼠火花達が、平たく圧迫されようとしている赤粒グミの内側を駆けずり回る。歓喜に爆ぜる艶めいた陰核の脈動が、ビクンビクンと布地を押し返した。淫らに燦めくラット・シグナル達は、肉芽の根っこから汗みずくの腰へと溢れ出し、万華鏡の如き恍惚の乱反射でもって、ウエストと鼠蹊部の間を、錦蕩音の坩堝へと変貌させていく。喜悅の詰まった腰が抜けてしまいそう。嬌声を奏でるランセリイは、半ブリッジの頂上である陰阜を、興奮する両腕の震えに合わせてカクカクと、情けなく上下動させるのであった。

「みっ、みっ、みっ——ッ——みひ——いいいいいいイツツ!!」

——ギユビーンッ！ ギユチオンッ！ パギユツツ！！ シュビヤッ、ギユオツ、ビチン！！  
次第に速弾きになっていく。

錯綜する指使いが、殆ど連続で肉根を搔き鳴らし、きついコード・ストローク。  
スナツプを効かせた右手首に、残像の翼が宿り、淫煩のビートが宙を叩き巻く。

クリトリスから繋がった全ての快樂神経が媚電の爆導索へと変わり、ナイアガラ花火の  
如く派手な爆発と燃焼を続け出す。そして、刺々しい快感で魔少女の撫で腰を追い詰めて  
いくのだった。

「ヒイヒイッ、つちや……ッ、ヒッ……イッ……ちやああ……つつ！！ ——ツア：  
…ア！ つか、らいもんらいもんらいううううつつくううつつ！！」

時々、弾くのに使わなかった指を臍口に飛来させ、シャボン玉の割れるような音を立て  
させた。陰阜に深く食い込んだショーツの楔から、真横に食み出している陰唇を打ち、悪  
戯なタツピングを仕掛けていく。花卉から愛液とスパークが跳び散った。ぬるりと愉悦の  
裏メロディが滑り込んでくる——。

「……っ、キイイイイイッ！！ アッ、アッ、アッ、ツガ——ッ、ア——ッ——  
アハ————ツツ————アアアア……っ……っ……——ほあアアアアオオオ  
オオオ————オオツツン！！」

息継ぎすらせず連続で喘ぎ過ぎ、一つに纏まった呼吸が、オクターブを上げ続け、ビブ  
ラートの効いた牝の遠吠えと化す。

時折、指の腹で撫でる仕草も折り混ぜて、響かせるのは病的に淫乱なブルリエント・グ  
ルーブ。駆け足のように目紛しく右指を上下させれば、叩弦&搔弦、颯りの連続弦技法。

艶めかしい弾法の嵐の前に、クリトリスは縮こまるどころか、ドングリの如く痼つて勃  
ちはだかり、自流制裁の洗礼を浴びることだった。少し前まで練香花火のようだった紅い  
膨らみの快感は、今や、シュウウウウウツツ！ と悅楽の火柱を噴き上げ続ける手筒花  
火となっている。灼熱に包まれた陰阜が、武者震いにも似た雌の艶震いをし、燃え蕩けて  
正体を失ってしまいうさだ。

「イイッグウウツツ！！ イグツヴウウツツ！！ イガアアアア————ナヒイイイ  
イッツ！！ イツデナ————ン——ガアアアツツ、ヤラナイイイイイッツツ！！」  
——パチュツチュンツ！ プチュツチュンツ！ チピユツ、ピツチュピ！！

下半身の筋肉を総動員する凄烈な忍耐を煽るつもりなのか嘲弄するつもりなのか、ジャ  
ンケンを高速で繰り返すかのように右掌を開閉させる。指の「行き」と「戻り」の両方で、  
享楽の卑鳴も姦しいピッキング中毒のサンドバッドを甚振りながら、ダブル・スウィープ  
&ランフリーズ、指弾の無慈悲な平手打ち。肌に絡みつく乱れた衣裳が、粘ついた衣擦れ  
の卑汁感で、劣情を煽るアドリブを効かせてくる。

肉芽を弾く度に子宮までもが衝き上げられるかのような、興奮のリズムに乗っていく。

(つ、続ければ続けるほど、気持ちよくな————つ)

ジンジン響く恍惚とした痺れが腰に満ち、急所を指で弾く度に、グングン、と幼身が天

へと舞い上がっていった。歯を食い縛り、腹筋を強く引き締め、全身に我慢の鎖を絡みつける。解放への欲求を、地に繋ぎ止める忍悦。拷問に近い壮絶な焦らし責めを、自らの手で味わっていく。

会陰部えいんが痛くなりそうなるほど括約筋かつやくきんに力を込めて、切なげに蠢かせた腔洞で快楽を磨り潰す。子宮が破裂しそうだ。毛穴から滝のように汗が噴き出し、ひくついた尿道が空潮からしおを噴く。蒸気の如く体内から湧き起こった甘い火気が、尿路の先でショーツの蓋ふたを膨らませた。着崩れたドレス越しに覗く素肌からは、ランセが銛を撃ち込まれた仔鯨のように全身を跳ね狂わせる度に、杏香の汗の霧が舞い上がるのだ。

——ヒュッピチュン！ ペヌルンッ！ チュビシツッ！！

迫り上がった腰が空中で8の字を描いて逃げ惑い、追い掛ける指がコード・ストロークのアップ・ダウンの振りを激しくする。

（堪えてるのに……っ、膨らむ——っ！ これ、ずっと、これ……え——っ！）

ロシアン・ルーレットで何よりも楽しいのは、ランセリイにとっては、引き金を引いてから弾が出るか出ないかの瀬戸際を実感することである。そして、回を重ねる毎に吊り上がっていく絶頂のリスクが、心身の昂りを否応も無く跳ね上げていく。その飛び切り至福の時間を、エクスタシー如きで終わらせてしまうだなんて、とんでもなかった。

法悦発射の一步寸前で、ギュリギュリと踏み止まりとど、弾倉の最後の回転を永久にやり過ぎ続ける、エンドレス・マッドプレジャー・オナニーパーティ。

快楽の喫水線きつせんが上がっていく。思考が途切れる。理性が溺おぼれて沈んでいく。

——ポチュンッ！ ニュピッ！ コチュンッ！！

「んあぁおっつ、んなあぁあおっつ！ あおっつ、あおっつ、あおおおおおっつ！！」

切れ長の瞳を蕩けさせ、そして虚ろに輝かせ、発情した猫の如き遠吠えを放ちながら、魔少女は荒れ狂う愉悦のメールシュトロームに引き摺り込まれていくのだった。

（そっか——、我慢すればするほど、物凄く気持ち良く——なるんだっ！）

少女は一つの真理に到達した。その瞬間、業深い身体に淫猥なパズルのピースがパチリと嵌まり、彼女を取り返しのつかない性癖という名のレールの軌上に乗せたのだ。

「くぁおっ!？」

指が正気を失う。

心の入力を受け付けなくなり、エスカレーターの道をひた走る。

銃弾の飛び交う戦場の如く、四方八方から飛来する官能の執行者達が、クリトリスを艶烈に弾き飛ばし回していくことだ。

変調を認識出来たのも束の間、儂い理性は、圧倒的な快楽に押し流されて行ってしまった。

「あっ、あ——っ、アっつ!! アヒイイがッ、アラぎっ、キヒイイあっつ!! ヒイ……ッ、ヒイイ………ッ——ピアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!」

最早、悦んでいるのか、泣き叫んでいるのか、分からない。





に引っ込んだかと思うほど、クリトリスが縮み上がったことだ。

続く、次の瞬間、決定的な淫悦の衝撃波が根芯を打ち据えてくる。牝髓の奥でストロボが焚かれたような灼熱感。生の象徴である快楽が、性感帯が無事であったことへの安堵と死への恐怖の反動で、大爆発を巻き起こす。股座の毛穴から、どつ、と汗が噴き出した。そして恒星じみた昂揚の中で、カツ、と蒸発していく。

ショーツを食い込ませた陰阜が激しく痙攣。本能に響く、淫煉獄の絶叫。嬖同士を、ぎゅつ、と固く密着させた膣洞の境目に、震悦の波紋が衝き抜けていく。尿道が仰け反り、膀胱と子宮の小空間に、ズズン、と重低音が轟くのだ。

「——あ、が————つ————あ————つ————つ!!」

キイイン！ という金属質の悦楽の高鳴りが、身体の奥底へと遠ざかっていった。

身の震える予感に痺れた理性が、体内に溜まった熱い呼吸を吐き出そうと口を開き——、「んん、うう、うう、なああああああああああつ!! つ、ああ、ああああああああつ!!」赤い鐘が爆発する。溜めに溜め込んでいた渴望のマグマが、めくるめく解放の悦びへと昇華し、大音声の歓喜となって少女の喉から噴き出した。

ビンと勃ったクリトリスの深い場所で、チカツと瞬いた随喜の閃光が、歯止めの利かない連続アクメを引き起こす。「ダメ」などと思う暇も無かった。それは、パンパンに張った風船が、針で突かれるのに似ていた。しかし、貪欲に積み重ねてきた我慢の果ての官能的破裂は、一瞬では終わらない。法悦の瞬間を幾度も塗り重ねるが如く、後から後から、引っ切り無しに繰り返す無限絶頂となつて、数え切れない程の毒のように煮え滾った甘つたるいオルガスムスが込み上げてくるのだつた。

(イツ、イ——く、の——止まら——な——あ————つ!!)

それはさながら、生アクメの速射連発打ち上げ花火。クリトリスその物が打ち上げ花火となり、極めて短い間隔——、弾かれた肉芽の一震え、悦の波濤に翻られる意識の一揺らぎ、イキ狂う腰の一痙攣毎に、快楽の大輪の火華を咲かせるのだつた。

凄絶な快感に限界突起の粘膜が怖気立ち、ショーツ生地のフードを熱して、狼煙のような淫気を立ち昇らせた。自らひくつき、股布に圧迫されながらも上下に拍動し続けるクリトリス。その煩悶の断末魔に、奈落の官能に喘ぐ全身の性感帯や器官が同調することだ。

「ふハ————あ————つ————ヒ————イ————イ————ツツヒイ  
イイイイイイイ————ツツ————ハ————ツ————ア————ツ————ア——  
————ツツ————ハ————ツツ————ア————ツツツ!!!」

一息毎に肺の中身を全て入れ替えてしまうかのような、深悦の呼吸、色素が薄くなる程に拡がって淫らかな口腔を覗かせる、熱に塗れて墮ちた可憐な唇。負けん気の強かった切れ長の吊り眼は、眦を裂かんばかりに見開かれ、蒼瞳の焦点を遠くへ投げ出したまま、視界の明滅する間隔を肉芽の痙攣にシンクロさせる。

「ヒ————ギ————ウ！ ひにゅ————う！ クキゅ————ツツ————!!」

ふな……っ、アハ……アッ……あああつっ……おおお……オオ……なああああああああああ……アッ……あああ……つ……オオオ……オオオ……オオオ……オオオ……オオ……

半ブリッジ姿勢で爪先立ちとなるランセリイは、ガタガタと震える両脚の付け根——陰唇の奥の陰核脚——が飽和した絶頂パルスを撒き散らす度に、荒馬の如く跳ね狂う。革靴のスコップが硬い床へこじめるように先端をなすりつけ、そのまま掘り抜いてしまおう。その内側では、ニーソックスの霞網を被った足の親指が、足臭の香気に噎せ返りながら、活動を始めたのに羊膜を破れない獣の赤子のように暴れ、靴の中底を幾度も擦り立てては、クリトリスの心電図を描き出していた。

オーバーニーとスカートの間から剥き出しになっている眩い太腿が、筋力の限界を来して激しく笑い出す。スカートのフリルを垂らし、揺れる幼臀。朱色の肉真珠を姿勢の一番高い所へ送り込み、なだらかなスロープを描いている腹で、窪んだ臍のリングを鼻息を荒くするかのように浅深させる。それは内部の子宮の絶息と連動して、淫ドングリが絶頂し性感が弾ける度に、神経の拍子を合わせて微細なアクメの花を添えるのだ。

「は……ア——ッ、つか、アガあ……ッ！　こ、腰……おか……ひ……っ！　も……っ……おか……か、らああ……ッ！！　は、はじゅ……ず、……ざりえ……はじゅ……う……れちや……ああ……ああ……ああ……っ！！」

急所に止めの一撃を見舞ったまま凍ってしまった右腕の、甘々しく震える肩が、粘液溜まりに、ふしだらな波紋を広げる。ぐいぐいとショーツを引いて股間を責め苛み続ける左腕が、自制を失って暴れ、肩の重みでパフを押し潰しては、突然跳ね上がった落下し、再び押し潰していく。

——ジュヴヴッ、ズヌルヌヌッ、ジュルルルウッ！

終わりの見えない連続オルガに陥ってしまった魂に、あらゆる淫靡が吸い寄せられる。妖しい黒瑪瑙の艶めきで全身を騷る笹葉型触手が、その裏面にびっしり生え揃った紅色の肉瘤絨毯の一粒一粒を、ねちっこい蛞蝓の交尾じみた蠕動で絡めてきた。衣裳を巻き込んで食み、または、その中に潜り込んでくる。熱情的な淫猥の尿管で押しつけてくるのは、肉芽の息吹を忠実かつ何百倍にも増幅させたかのような媚震動。

「……あ……づ……っ……あ……熱……いうううう……熱……い……熱……っ！！」  
甘い粘液で包み蒸しにされた幼肌が、幾分の一かでもクリトリスの色に近づこうとかのように、悶えに悶えて紅葉する。ずれたカップから飛び出したニブルが肉瘤達に揉みくちやにされながら、逆にドッグファイトを挑み返す勢いで、紅玉突起に負けじといきり勃つ。

笹葉型触手に潜り込まれ、湿音を立てて内部を掻き回されるゴシックドレスすらも、随喜の秘芯や身の震えと同調し歓喜を体現した。汗と粘液で卑濡れた生地が、性的興奮に溺れる蒼眼が知らずに帯びている魔性の光を反射し、そうして作り出す妖しい彩光を、延々と続く法悦に合わせて波紋を広げるかのように波打たせるのだった。

全てが渾然一体となり、紅蓮の業火で一気呵成に少女を包み込んだ。



それは、決して安易に法悦に墮ちるまいとする矜持だったのか、それとも――。

「――エッ――ツツ――エッ――ギ――エッ――ギ――イイ――ツツ――ツツ!!!」

牝身の根源的な部分で、濁った屈天昇墮の嵐が渦を巻いた。昇り詰め続ける肉芽の根元の奥深く、潮噴きアクメをキめかけた腰の深淵の底で、半鐘が打ち鳴らされるが如き閃悦のサイレンが、ズギュンツツ!!! ズギュンツツ!!! と、膨張と圧縮を繰り返す。嬌演曲の決着を寸止めされた尿道が、慈液の通過を哀願して泣き悶える刹那の拮抗の間、ランセリイは宿敵たるクリトリスとの合一を果たしたことだ。自身単体では吐潮機能を持たず、ただただ淫樂を貪るだけの、高貴な器官。己の流欲極まった潮噴きを封じたことで、それと同等の境地へと到達したのだった。

「――オッ――ツツ――ゆッ――ツツ――ミッ――ウッ――  
ユッ――オッ――ツ、ホッ――オオオッ――ツツ――ホアッ――アオオッ――  
――ツツツ!!!」

その時、彼女は、人型の陰核であった。体内に閉じ込めた牝潮が、行き場を求めて凶暴にうねる度、内側から浅ましい肉体全体をクリピンの如く弾かれて、総身が消し飛びそうな焦らされ狂いの冥利に媚震いをする。血色を豊かにした白い裸身が、爆風じみた嬉悦の波動を発散させた。このまま永劫に刻が止まり、意識だけが続いたならば、タンタリゼーション・ニンフォマニアの永遠の樂園へと辿り着けることだろう。

そして、それは、分を弁えない小娘が覗いた、邯鄲の夢であった。

――ブビュツツ!! ビュブツツ!! ジュビユウウツツツ!!!

壮絶な淫響劇の果てに放たれた、粘ついた噴汁音は、塵都の暴君が労役知らずの官能突起に代わって潮を噴く為だけの下位器官、婢女へと成り下がってしまった証左。

(お漏、らひ……っ、わらひ、白いお漏らひ、ひてるううううっ!!)

真っ平らになって下から塞がれた尿道が、ドクンドクンと血管の如く脈打ち、強引に奥から挟み開けられた。濃厚な白い潮を吐き出していく。決壊した堤防が悪足掻きをすればする程、その向こうに濁水を押し留めようとすればする程、奔流は敗北者を跡形も無く押し流していくことだ。一通液毎の灼けるような快感が、放電の束で蟻の一穴を突き刺し、尿管のトンネルごと、官能の洪水に耐え続けていた腰や股座を粉微塵によがらせ倒す。

「イ……ヒ……って……えええ……っっっ!!! ツ……ちや、いけ……いけ、なひ、のに  
いいい……っっっ!!! と、とまら……な……っ……あああ――っっっ!!!」

ガクガクと腰が痙攣し、魂が引き摺り抜かれていくかのような凄まじい恍惚が、抗つていた少女の尊厳を性の奈落へと失墜させていった。まるで、癩癩玉がアナルビーズ状に繋がって尿路に埋め込まれているかのようにだ。詰まっていた痴濁達が断続的に通り過ぎるのに合わせて、それらが順繰りに、潮噴きオルガの快美なエレキテルを爆発させていく。小指の先にも満たないちっけな孔が、官能の汽笛を吹き鳴らし、息も絶え絶えにビくつき喘ぐ都度、身も心もズグズグと骨抜きにされていってしまう。



「い……イ……気……イイ……つつ……尿ど……燃え……う……の……お……っ！ こんなんじゃ……シエリス……お……お嫁に……貫えなく、なっちゃうのおお……つつ！」  
 随ち果てた仔牝が達し続ける限り、潮噴きも、また、止まらない。

大海と化した魔少女の影が、奈落の歓喜にさんざめいた。悩乱する幼体面に群がる艶めかしい黒瑪瑙の笹葉型触手達が、今にも果て切って崩れ落ちそうな肢体を支えていく。彼女自身でもある触手達は、影の波を飛沫<sup>しぶ</sup>かせて根元を滑らせていき、感極まったように、華奢な腕足、胴腰へと巻き付くと、体勢の補強と同時に強く締め上げていくことだ。

加えて、互いに絡み合い、人間の腕ほども太さのある螺旋状の集合体を作り出すと、それでランセリイの背中や腰の裏を押し上げる。禍々しく淫らに蠕動する幾本もの斜円柱が、ばらけた先端部位で彼女を衝き上げ、拘束し、呪われた恍惚の極致へと捧げていった。それはまるで、一匹の大魚を四方八方から箆<sup>やす</sup>で突き刺し、生贄として高々と持ち上げるかのような光景だ。

「ふぎや……あ……っ！ ふーにや、う……あ……つつ?!」

潮噴きに至って過敏になった所に、更に、被虐の薪が焼<sup>く</sup>べられていく。そうして、絶頂曲線が最高値を示した瞬間を、残酷に持続させられる。引きかけた官能の波が、逆に、一段階上へと蹴りトばされたことだ。

「カ……ああ……ああ……つつ……!! やあ……ああ……つつ!! しか……あれ、て……る……つつ、シエリスに叱<sup>ひか</sup>られちゃってるうううう……つつ!! もつと……もつろおお……つつ……!!」

自己懲罰の念が暴走した、母胎の似姿の触手達が螺旋の絡み合いを強くすれば、それは全身を戒める拘束肉円柱の締め上げである。肢体への食い込みも、ぎゅつと深くなり、肌や衣裳がぐいぐいと巻き込まれていく。漆黒の生地が引き絞られ、(衣壁表現) チョコレート・マドレーヌの波模様に似たシエルパターンの、被虐のドレーパリーを作り出した。肩や胸からは、巻き貝のように振<sup>ね</sup>られたドレスが剥けて、スノークリーム色の裸身が零れて身悶える。殆ど直線になる程引つ張られている背面ショーツの隣からは、臀部の双丘が剥きかけの葡萄<sup>ぶどう</sup>のように、慎ましやかな幼い果肉をさらけ出すことだ。

「ヒ……イイ……ツツ……く……ッ、み……ヒあイイ……っ……ク……つつ!! ヒ……に……ウ、っ……く……ふユア……う……うアううう……つつ……ツツ……!!」

生ける滑り台と化したランセリイだ。下腹部に染み込んだ随喜のラブジュースが、布質の硬いアウトター・コルセットの下、肌に柔らかなネグリジェを通して伏流を作り、枝分かれした末の指先を、少女の喉元にまで伸ばしてくる。その反対側でパニエの膨らみを揺さぶられるローゼット・ミニスカート。黒薔薇の花弁から生太腿の雌蕊が二本伸び、クリトリスが絶頂する度に、根元の中央から、ボタツ、ボタツ、と白濁の卑蜜を垂らし墜<sup>おち</sup>としていく。

「は……はひ……はひ、ん……つつ!!」

甚振られ尽くした牝鬼灯<sup>めすほおずき</sup>が、蠟燭<sup>ろうそく</sup>の芯になって炙<sup>あ</sup>られているかのようなだった。包んでい

る掌までもが熱くなる。のたうつ肉豆の、鯨が大海を跳ねるが如き躍動感。逆に本人はクリトリス天頂ポーズのまま、動き方を忘れてしまったかのように蕩け顔を晒し、そういう形の彫像であるかのように放心してしまう。全身全部で、『法悦の調和』を見せるのだ。肢体を支える頹廢した触手のセフィロト樹の頂上で、被せた掌の縁から、ゆらゆらと淫気の陽炎が立ち昇っている。それはあたかも、悦楽の新生だった。若い肉芽から瑞々しい官能の性癖が芽吹き、古き倫理の蛹を脱ぎ捨て、悪しき官能に染まった墮蝶へと羽化していく象徴であるかのようだ。

「か——あ——ア……つ、——か——ハ——あ……アアア——…つ…!!」

壊れ切ったガラクタの如く掠れた産声を上げ、少女は自棄官能に失墜した者の不随意な反応を見せながら、高浪に固定された恍惚の嵐の中で果てていく。魔力すら消費して、愛液の精製分泌がフル回転。液体化した電撃の如く感じる芳虐な白濁が、間歇泉の如く尿道から噴き出し、臍口から吐き流される。淫らな導管として酷使される下腹部が、精気を絞り出されていく焦悦に苦悶する。

更には——、

(いぎいイイ……ツツ！ あしよつ、こ……オ……オ！ イ、ぎゆの——反芻ツ、ひてるおおおお——っ!! ナ、ニ、こ、れえええええエエヒイイツ!!)

今やすつかりバカになってしまった腰は、餓えという熔岩を全て吐き出さねば終わらない、悦楽の噴火山であった。どつぶりと敗北に浸かるヴァギナに、オルガスムスの悶絶パターンが焼き付き、外部からの刺激が止んだ後も、内部で自発的に絶頂をリピートさせ続けている。掌中で親指の付け根の膨らみに押さえ込まれた紅玉突起が、しゃっくりを出すかのように幾度も跳ね爆ぜ、強烈な絶頂の残響に泣き悶えることだ。

「……きゅ……オ……ホ……オ……ツ……オオ……ツツ……オ……ツツ!! な……ああ……オ……ウ！ なオ……オオオ……ううう……ツツ!!」

触れられてもいないのに、ピック、ピック、勝手に反復絶頂し続けるクリトリスに翻弄され、荒波に揺られる流水の如く、あてどなく空腰を使わせられる。

(ク、リッ、クリイイ——ツツ——にヒいいいっ!! 勝利——つ——宣言——ッ、さりえひやつてるえうううよううううっ!!)

打ち負かそうとしていた陰核亀頭の方が、ご主人様になっていた。アクメの反芻が垂れ流され、オーバーヒートした恍惚が焦げ付き、痛みと紙一重の享楽の責め苦へ変わる。それにすら欣びながら、喉の奥と臍奥の子宮頸管口とで掠れ喘ぎ、伸びシヨーツの圧迫で鼻先を摘み上げられた肉芽の軒先——、尿道口から、蕩け滾った白濁液を、ゾビュツ、ゾビュツ、と噴き出していくランセリイである。

「み——っ、あッ、あヒ……イ……ツツ!! うウ……みいい……う……オオ……!!」

モールス信号じみた間隔で、快感の放電が襲いかかってくる。その都度、クラッシュ・エクスタシーの火薬を塗され、一斉に引火させられるが如く、汗と痴蜜で濡れ光る腰が跳ね踊った。体内に張り巡らされた肉芽の淫楽神経に、ギュウウツ！ と臍洞を握り込まれ

るような、根深い法悦を味わわされていく。

「ひ……………ツ……………い……………ひい……………いい……………い……………つ……………!!」

肉体に刻まれたアクメの原盤が摩り切れて、淫らの炎が自然鎮火し、嬉液の噴出が絶えるまでの間、彼女は、たつぷりと主従関係を教え込まれたのだった。

(……………イ……………ちや……………た……………)

やがて、体感時間の流れが余韻のコールタールに漬け込まれ、緩やかに鈍る。燃えるような倦怠感の中、漸く自分の掌が動きを取り戻した。親指の根元の温かな膨らみで、コミュニケーションとクリトリスを捏ねくり回す。膣内の中指と薬指を押し上げて、搔き摩り、天井裏の尿道から、残っていた潮汁を、ビュクツ、ビュクツ、と絞り出した。肉の焼け跡に、ホカホカと湯気を立てる歓喜の印が溢れていた。

(自分でえ、自分のことお、殺ひちやったあ……………あ♪)

ランセリイは自分を殺して、殺された。与奪倒錯。自己完結の悪淫夢。

これもある意味、母から受け継いだ破滅願望と言えるのかも知れない。その歪んだ発露、継承である、アバンドメンテイズム自棄衝動だ。

(……………気持ひ……………良かった……………)

快樂と、興奮と……………惨めな敗北感。グスンと鼻が睨られた。悦びに打ちのめされて赤らんだ、腫れぼったい眦から、じわあつ、と悲愴な涙が溢れ出し、頬を伝っていく。

「……………ハハ……………わたし……………結局……………負けてばかり……………」

肉体のみならず、心が落ち着くまでも、かなりの時間と労苦を要した。やがて手探りで床を見つけて、よろめきながら起き上がろうとするランセリイ。今の自分に闘う力は無い。とにかく回復するまで、何処かに隠れて息を潜めなければならない。

と、先へ進むもうとした、その時だ。

「ふあ……………?」

指先に綿菓子に触れたような気がして、上体を浮かせた少女は気の抜けた声を出してしまった。汗で柔軟になった腋窩えきかが後ろに引かれて、つんのめる。

「……………な……………?!」

良く注意して見回せば、周囲を何時の間にか、淡く揺らめく何かを取り巻いていた。細い蜘蛛の糸である。気づかぬ内に、白い八重菊の紋を縦横無尽かつ幾重にも折り重ねたような巣網が張り巡らされていて、それが手足に絡み付き、動きを阻害してきたのだ。

「——ヴヅファイアンカも、結構、抜けてるよね。ま、宿命かな、これは。獲物を罅らずにはいられない者達の……………。だけどボクなら、餌如えさきに意識を注ぎ過ぎて油断するような真似は、決してしない」

足音も気配もさせずに、一つの人影が前方に立っている。

暗殺者特有の虚無的で鋭い目つきを丸縁の伊達眼鏡で和らげ、頬にシャギーを入れたカジュアルなブラウン・ショートカットの奥から、はしばみ榛色の瞳で獲物を品定めしている少女。



性に無軌道に見えるよう、わざと剥き出しにした肩の上に、酷薄な顔立ちを乗せている。あどけなさの残る白い裸身は、標的の油断を誘う為に永遠に成長を止め、ルーズに着崩した柔らかな茶色の臍出しニットに包み込まれていた。胸の中央で八本脚を広げる黒蜘蛛の柄は、ターゲットに近づく為にふしだらな女学生を演じる時でも、なかなか外せない、数少ない自己主張であった。

「やあ、ランセリイ。地下室ぶりだね」

視線を遮る物の無い腰括れが、ベリードダンスのように軽くリズムを取れば、くねった生臍が踊り、赤茶の瑪瑙色のプリーツ・スカートが裾を妖しげに揺らしたことだ。雲間から差し込む陽光の如く、縦に折り目の連なった、そして色合いに、どこか不穏な影を感じさせる、シャドウ・サンバースト・プリーツだ。その下の暗がり、太腿とニーソックスが脚線のアンサンブルを奏で、内腿の絶妙なチラリズムでもって、余人の情欲やマニアのフェチ心を揺さぶってくる。蠱惑的な、焦樵カジュアルの悪魔の擬態。男も女も虜とりこにし殺めてきた、魔性の装いである。

「ところで、お礼は、まだかな？ 長ったらしいお楽しみを邪魔しないでいてあげたんだから、感謝して貰いたいものなだけけどね」

誰であろう、ランセリイとヴェゾフィアンカに立て続けに弄ばれた挙げ句に、ザーバツハの傀儡くぐつにされていた、魔神ギルバの眷属けんじゆ、蜘蛛少女のミーティだ。魔物喰らいとは種類の違う、より先鋭化されたサディスティックな微笑みが、空間を埋め尽くした捕網の中央で勝ち誇る。

——オ、オナニー、見られちゃった!?

羞恥で魔少女の頬が、林檎りんごの如く赤らんだ。

「つあ……はあ……、ア……、ミー、ティ……、まさか、待ち——伏せ……？ どうして、わたしが、ここにくるって……!？」

「君は自分の意志で逃げる方向を決めていたつもりだったろうけど、本当はギルバ様の思念波で、ここに誘導されていたんだよ。そんな物を受信しちゃった理由は……言わなくても分かるよね？」

言外に、腐泥の王の眷属として変質させられかけた影響が、まだ残ったままである事を仄めかしながら、ミーティが近づいてくる。罨かげにかかったランセリイは、自分でも制御出来なかった激しい自慰で消耗し切ってしまったって、後退あとずさるのが、やっただ。のみならず、動こうとすればするほど、身を潜めるのを止めた蜘蛛糸達あしぢうが絡みついてきて、前へと引き摺り戻されてしまう。実質的には殆ど動いていない。その場に粘りつけられてしまった、尻餅をついたような姿勢で藻掻く獲物。そこに四つん這いで乗り掛かり、眼光を冷ややかにしたミーティが、憎々しげに両肩に爪を立ててくる。

「ふふ……あの時とは、体勢が逆になったね……」

その表情は控えめに言って、プライドを磨り潰された屈辱と、それを遙かに凌駕する殺意とに満ち溢れていた。

「やりたい放題だけどさ。君は少し、ボクらのことを、甘く見過ぎじゃないのかな……」  
——ギイチユイ……ヌヂヂ……ツ……。

応戦の構えすら取れず、次第に量を増す粘着糸に束縛されて喘いでいく魔少女の周りで、汚穢な生物の這いずる湿音が沸き上がる。

グリーディ・タロットの世界に強引に押し入ってきた、腐泥の王の年輪を経た触手だ。空間が極彩色に歪曲し、爛れ堕ちる。そこを突き破って溢れ出した、地を這う何か、静謐な鏡面を炙った飴の如く握り潰してねじ曲げ、瘤だらけの身に取り込んでいく。セットの無い舞台を肉の樹根で埋め尽くしながら、大規模な地殻変動の如く中央から隆起するのは、厭らしい単眼を持つ巨大な肉塊の島だった。表面を包むゼラチン質の粘膜が震えて、洞穴を吹き抜ける恐風の如き重低音を響かせる。

「キッキッキッキ!! 小おオ娘えええ……つつ! 小癩な身体に我が力の精髓を宿した代償、今度こそ奪い受ける!! わざわざ足を運んでやったからには、逃がしはせんぞおとおおとおおつつ!! 観念するのだなああああつつつ!!」

【以下、緊縛凌辱へ】